

# 広い視野を持った生徒の育成とN I E

長野県諏訪市立上諏訪中学校 恩 田 朋 彦

平成16年度につきましては、せっかく実践校に指定していただいたのですが、個人的な理由で実質的に全く活動ができませんでした。この点を深くお詫びし、過去私が携わった3中学4年間（実質的には2中学3年間）のN I Eとの関わりの中で感じた事の中から、以前から問題点と考えていた「N I E実践校の指定をはずれた後の対応」を書かせていただくことで、本年度の報告書とさせていただきます。

N I Eの活動によって得たことはたくさんあるのですが、あえて問題点として「N I E実践校の指定をはずれた後の対応」についてとりあげたのは、17年度は、私は幸か不幸か初めてN I E実践校の指定をはずれた後も同一校に勤務する体験をすることになるからです。以下にあげる二つの点をどのように解決していくかを17年度の私のN I Eに関する課題として考えていきたいと思います。

まず最初の点ですが、「N I E」に対する認知度は、私が平成9年度に岡谷西部中学校で初めてN I E実践校としての活動に携わった頃に比べますと、格段に上がっています。しかし、実践校に指定ということになりますと学校体制の中で取り組むことができるのですが、指定がはずれ、実践の中心となっていた職員が異動すると、「N I Eって何？」という状況が生じかねない現実があります。勿論、個別には実践校指定に関係なく長年にわたってN I Eの主旨にそった授業を行っておられる先生方が大勢おいでになります。しかし、従来の9教科の授業時間が減少する中で新聞の活用を訴えると、とても大きな負担増（実際にはそんなことはないのですが）のようにとらえられてしまいます。私は、日常の教育活動をバックから支えるのがN I Eであり、「生徒の視野を広める」ための方法の一つととらえて活動してきましたが、ややもすると、N I Eそのものが手段ではなく目的であるかのように考えられてしまうからかもしれません。この問題については、簡単に解決する方法は無いかもしれません。私たち新聞活用のメリットを知る者が率先して地道な活動を続けることで、N I Eのねらいを理解していただくようにしていくしかありません。

二つ目の点は、指定がはずれると物理的に新聞が手元に届かないということになります。そうすると、（あくまで私が経験した中学校の例ですが）例えば図書館の予算では新聞の購入は難しいため、学校職員が購入したものを一日遅れで置くくらいしかできません。また、学校職員が購入した新聞の行き先が決まっているものもあるので、そうすると学校内で日常的に生徒の目に触れる新聞は無くなります。新聞は家庭でも読むものとは言うものの、一般的な多くの生徒（勿論、N I Eの活動によって新聞に目を向け始めた生徒は大丈夫ですが）はなかなか家庭で新聞に目を向けられない現実（最近は新聞を購読していない家庭も以前より増え）があるので、新聞というものの存在そのものを強く意識させるのは学校しかありません。この問題の答えの一つは、他の新聞については理解が不十分で申し訳ないのですが、信濃毎日新聞については、学校で教育のために使われる新聞については安価で提供してくださる制度ができています。これは朗報です。このような方法が存在すること、また他紙についても同様な方式が存在するならそのことを周知することで、他の先生方の金銭的な面での垣根を少しでも低くしていきたいと思います。

長年にわたるご支援に心から感謝いたします。ありがとうございました。